

キャンパスを歩き、街を訪ねる。

東京大学名誉教授、祥雲弘文先生と農学部グラウンドを歩き、
森林風致計画研究室の下村教授と農正門前のベーカリーを訪ねる。

遠心分離機とソフトボール

農学部グラウンド

農学部のあるキャンパスの北部、ちょうど分子細胞生物学研究所の裏手に、一高時代からの運動場がある。農学部グラウンド(通称)だ。雨模様の空の下、ぬかるんだグラウンドにいま人影はないが、晴れた午後にはソフトボールやサークル活動にいそむ学生たちの姿が見える。

東京大学名誉教授、祥雲弘文先生も、かつてはここで汗を流したひとりだ。子供のころ「虚弱体質」だった先生は、体を鍛えるようになったという。農学部時代は陸上選手として、このグラウンドを走った。

また、野球もよくやった。祥雲先生の専攻は酵素学。研究室では素材を抽出するために遠心分離機を回すが、昔の機械は時間がかかり、いったん回すとしばらく止まらない。それで、仲間とグラウンドにでかけた。「野球に熱中しすぎて分離機のことをすっかり忘れてしまったこともあります」と先生は笑う。

のちに、東大100周年の記念事業で運動場を整備する計画があり、この農学部グラウンドも候補に挙がったが、結局、選ばれたのは本郷キャンパスの御殿下グラウンド。「あの時、ここが選ばれていれば」と、先生はいまでもくやしがる。

その御殿下グラウンドは漱石の『三四郎』にも出てくる。運動会の場面で、短距離走者を指して「どうして、ああ無分別に走ける気になれたものだろう」、見物に来た良家の令嬢を評して「あんなものを見物する女は悉く間違っている」と断ずるところが漱石らしい。

「そういえば昔は全学の運動会があって、学部別にそれぞれカラーが決まっていたね」と先生が思い出す。農学部のカラーは紫だったそうだ。

最近は学生や職員が一緒になって運動をする機会も減った。研究室には最新装置が入り、研究者は実験をしながら論文を書く。とてもグラウンドで野球に興ずる暇はなさそうだ。

「論文の大切さもわかりますが、たまにはグラウンドで戯れることも必要でしょう」と祥雲先生は静かに話す。「『健全な精神は健全な身体に宿る』といいますが、病気になるってしまえば、いい研究もなかなか成りません」。



東京大学名誉教授
祥雲弘文先生



農学部グラウンド利用についてのお問い合わせ
本部(教育・学生支援系)
学生支援グループ 体育チーム
電話: 03-5841-2510 Fax: 03-5841-2523